# 故 加藤裕己教授を偲んで

江　藤　　勝

2012 年 1 月 22 日の夜遅く，旧友から電話があり，「加藤裕己教授が 21 日夜に亡くなられたと聞いたが，どのような状況であったのか」と，問われた。しかし，加藤教授が亡くなられたことを，私はその電話で初めて知ったため，思わず「本当か！」と大声を上げ，且つ，彼の質問に即答することが暫くできなかった。

勿論，加藤教授が体調を崩され，授業期間中に検査・治療のため入院されることについては，11 年の 11 月下旬に大学へ出された届けにより，また，他ならぬ御本人から私への電話により承知していた。電話では，病名についても触れられ，これからより詳細な検査と当面の治療がなされるとのことで，御本人としては，私が代講することになった「日本経済論 b」の試験実施や採点等は，治療が終われば，直ちに復帰し，御自身で行いたい旨の話もされていた。この為，私や事務局としては，彼の近い復帰を前提に対応策を固めていた。しかし，その後入院され，治療が続くことになり，更に検査の結果，重篤な状況にあることが判明し，手術を受けられた後，集中治療室で治療され，一般病棟に移られたが，1 月 21 日の夜に急逝された。勿論，私としては，加藤教授の入院から 2 カ月足らずでの他界は，最初に記したように，全く信じ難い，余りにも早過ぎる他界であり，これほどの短期間でお別れするとは夢にも思わなかった。今となっては，何よりも彼の安らかなる眠りを祈念するとともに，残された御家族の皆様へ心から哀悼の意を表させて頂く次第です。

加藤裕己教授は，1947 年に出生され，1974 年 3 月に東京大学経済学部を卒業，同年 4 月から当時の経済企画庁に入庁後，同庁が内閣府の一部として他省庁と統合された後の 2005 年 3 月まで，内閣府に勤務された。

この期間の約 30 年間に，経済企画庁では，経済白書や世界経済白書等執筆・編集の担当課長や経済研究所次長として，内閣府では，経済財政運営や分析担当の大臣官房審議官として活躍された。また，OECD の経済統計局エコノミストとして，82 年 9 月から 4 年間，パリで海外勤務されるとともに，国内の埼玉大学大学院，学習院大学，東京大学大学院，法政大学大学院に，客員・非常勤等の教授等として勤務された。

内閣府退職後には，日本エネルギー経済研究所の研究理事・チーフエコノミスト等として，調査・研究に従事され，同時に，千葉商科大学大学院客員教授等としても勤務された。

故 加藤裕己教授を偲んで

東京経済大学には，2005年度の後期から経済学部非常勤講師として，初めて教壇に立たれた後，06年度の4月から経済学部教授（国際経済学科所属，世界経済論・国際機構論等担当）として着任された。教授として着任された後，急逝されるまで6年近く，本学に，ご貢献・ご協力を頂いたことになった。

また，この間に，学内各種委員会の委員を務められ（07年度から11年度まで，11の委員会の委員を担当），亡くなられるまで，教育・研究に加えて，学内管理業務遂行にも大きく貢献された。

加藤教授の研究業績は，極めて多数の分野にわたり，かつその分野内の数も極めて多数に及ぶものである。具体的には，日本を含む世界主要国経済計量モデル等による分析や経済予測，戦後日本経済史の諸テーマ，日本の経済政策の分析と評価，一般的な世界経済の動向・課題と国際金融・貿易・為替・直接投資等分野の分析，日本経済論の個別問題としての物価・雇用・高齢化社会・不良債権等に関するものである。そして，最近における主要関心分野は，エネルギー・環境・金融分野であったと言えよう。これらの多分野における多数の研究を可能とされたのは，それまでの蓄積に加えて，内閣府退職後の，上記エネ研への転職や，総合研究開発機構の編集主幹として協力された結果と考えられる。更に，これらの研究成果を，多数の講演会や座談会に於いて情報提供され，社会的にも広く貢献された。

以上の広範多岐にわたる研究業績を前にすると，急逝なくば，残された約5年間の本学勤務の時間を利用されて，これまでの研究成果の総合的な取りまとめをされたのであろうと，想像せざるを得ない。

最後になりましたが，加藤教授は，真面目で温和な人格者であり，趣味は音楽鑑賞・読書であると語っておられた。また，フランス・ワインについての造詣も深く，ファッション・センスも抜群と評判であった。早過ぎた他界を，改めて惜しむとともに，再度，心からご冥福をお祈りします。